

第 2 号

中谷宇吉郎 雪の科学館 通信

1995(平成7).3.31

NAKAYA UKICHIRO
MUSEUM OF
SNOW AND ICE

発行/中谷宇吉郎 雪の科学館
〒922-04 石川県加賀市潮津町イ106番地
TEL 07617-5-3323 FAX 07617-5-8088

加賀市出身「雪博士」の森羅万象 雪と氷の神秘と科学

『中谷宇吉郎 雪の科学館』が平成6年11月1日オープン!!



落成式(10月31日)のテープカット

科学技術庁長官賞

当館で上映中の「科学するところ—中谷宇吉郎の世界」が、第36回科学技術映像祭で科学技術庁長官賞(ポピュラーサイエンス部門)の受賞が決まった。企画の市教育委員会と岩波映画制作所が4月18日東京・科学技術館で行われる授賞式に出席する。

第1回いしかわ景観賞

3月17日、当館は「第1回いしかわ景観賞」を受賞した。平成6年度に制定された県景観条例に基づき、県内の適正な景観保全・形成活動に対して表彰される賞である。



11月28日、アメリカの雑誌社「ナショナルジオグラフィック」の記者が当館の「グリーンランド氷河の原」の取材に訪れた際、湖北小学校の3年生11名が写真撮影に協力した。その後、中谷芙二子さんから小学生にサイン入りの「霧の絵はがき」が贈られた。

目 次

- 2～5. 落成式特集
- 4. 茅伊登子さんのあいさつ
- 5. 国際雪氷学会会長からのメッセージ
- 6. 小松左京氏の講演「地球に生きる」から
- 7. 雪結晶のデータバンク 宝石の輝き
..... 対馬 勝年
- 8. 氷の中に咲く「雪」の花
..... 吉田三恵子
- 9. 来館者の記念スナップ等から
- 10. 今年の雪——加賀と白峰と大雪山
..... 神田 健三
- 11. 書誌情報
- 12. 寄贈・交換図書 インフォメーション
編集後記

落成式 (10月31日)

中谷宇吉郎雪の科学館の落成式は、柴山潟湖畔公園の落成式も兼ね、館の前のスロープ下に設営されたテント会場で行われた。片山津コーラスによる合唱「雪は天から送られた手紙である」の後、式は午前10時に開始された。式には、博士の遺族と門下生ら関係者約80名、国・県・市議員30名、市当局や関係者約80名、工事関係者20余名を含め、約300名が出席した。



片山津コーラス



矢田 松太郎 市長



フレミング・ヘディゴー氏



田中 正 市議会議長



樋口 敬二氏



中谷 健太郎氏



前列左から、東晃、樋口敬二、中谷健太郎、ロトー・三代子、オルセン・咲子、中谷美二子、他の各氏

式では、最初に矢田松太郎市長が式辞を述べ、藪谷栄一教育長が工事経過報告を行った。続いて、デンマーク大使のフレミング・ヘディゴー氏、知事代理の吉川浩民地方課長、大幸甚県議、田中正市議会議長が来賓祝辞を述べた。そして、祝電等の披露、来賓・協力者の紹介の後、館の監修者を代表して名古屋大学名誉教授の樋口敬二氏が、遺族を代表して中谷健太郎氏（由布院、亀の井別荘）が、建物を設計した磯崎新アトリエの専務・藤江秀一氏が挨拶した。

遺族は、長女で地質学者のオルセン・咲子氏（米国、ウイスコンシン大学）のご家族、次女でアーティストの中谷芙二子氏（原宿）、三女でピアニストのロトー・三代子氏（米国）、そして甥の中谷健太郎氏が出席した。

時折雨が降る、肌寒い一日であった。

◇祝電・メッセージ・花等を寄せられた方々◇

グリーンランド自治政府文化大臣マリアヌ・ヤンセン、グリーンランドヨルゲン・ヤンセン、国際雪氷学会会長ビョルン・ウォルド、雪氷学会名誉会員高橋喜平・湯川龍二、湯布院町長佐藤雄也、上富良野町長菅野學、他。

博士遺族関係として、鳥井信一郎、武見英子、中村紘子、板倉与兵衛、原田花子、井上直一、小林米作、篠田由紀、他。

国・県議員、各観光協会、各工事関係者、他の各氏。

落成式の後、参列者は館内を見学した。



祝賀会であいさつする東晃氏。マイクの右はオルセン・咲子氏。
右端は、グリーンランド岩石輸入の際の協力者のヨルゲン・ヤンセン氏

落成祝賀会 (31日午後)

落成式の午後は、片山津テリーナホールで、落成の祝賀会が開かれた。祝賀会では、矢田市長のあいさつ、向出県議による乾杯の後、日本雪氷学会会長東晃氏、米国C R R E L研究所の熊井基氏、岩波雄二郎氏、茅誠司氏の夫人の茅伊登子さんがそれぞれあいさつした。

落成祝賀会での

茅 伊登子さんのあいさつ

ご指名にあずかりました茅伊登子でございます。一市民といたしまして、家庭の個人的な環境の中で、中谷さんとたいへん仲良くさせていただきました主人と私ですので、今日のこの会と館の完成に、ひとことお祝いを申し上げたいと思います。

今も私の手もとに、中谷さんと、主人・茅誠司が、北大の教授になるという前提でヨーロッパに留学した時、フランスで一緒にとった写真がございます(パリ,1929年)。この時は二人が、ドイツ、チェコ、スイス、フランスなどをご一緒に節約旅行をして、主人は手紙の中に、こうした写真に解説を書いて、送ってくれたものでございます。主人の随筆集の「続 雪樁」にはストラズブルグ大学に有名な磁気学者のワイス博士を二人でお訪ねしたことが書いてありましたのを思い出して、この度また読んで見まして、こんなにも中谷さんと主人は、個人的にも学問的にもたいへん仲良くさせていただいたのだとつくづく、思いました。

中谷さんのご業績が立派なことは、こういう科学館が出来たことでも本当によく表現されておりますけれど、一方、人間的にもすばらしくて、実にご親切な方でした。

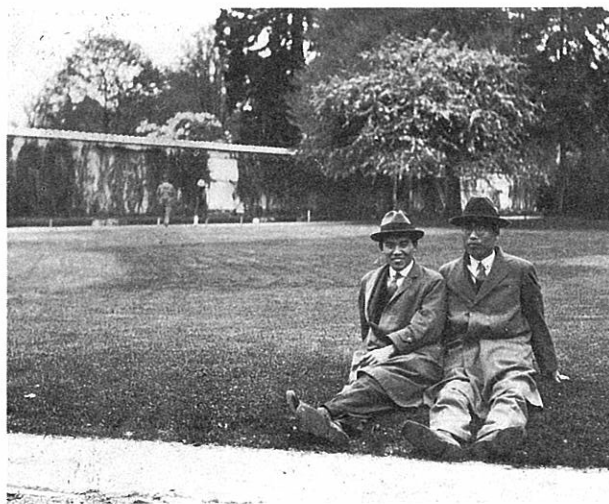
私事になってしまいますが、私の父は、岩手県水沢の緯度観測所長をいたしました木村榮(ひさし)と申しまして、昨(1993)年、金沢市が「ふるさと偉人館」

を作って業績を紹介してくださいました。私が両親ともに金沢出身だったものですから、同じお国同士ということもあって、北大のときから家族ぐるみでとてもお親しくさせていただきました。中谷さんのお母様にも、妹さんご一家とも、全部仲良くおつきあいさせていただきました。

ここにおります長女が小さかった時、その頃巣鴨にありました木村の家に上京していた私と長女を、東京に出たついでだとおっしゃって、父親がわりのようにお世話をしてくださいまして、はるばる札幌まで連れて帰ってくださいました。そのように数かぎりなくお礼申し上げたい事ばかりでございます。

また、茅誠司についても、北大から東大への道をつけてくださり、日本の真ん中の東京をベースに活動させていただいたのも、中谷さんのおかげでございます。中谷さんの社交のお力で、日本医師会長の武見太郎先生や、時の宰相吉田首相とか、お親しくしていらした方々に、何かというと「あ、あいつがいい、茅がいい」って言ってご紹介くださり、主人もそのような方とお知り合いになれました。この席をお借りして、ありがたくお礼申し上げます。(笑い)

ほんとうに、やさしい、ご親切な方でした。個人的な思い出の一端を申し上げて、今日のお祝いの言葉とさせていただきます。(拍手)

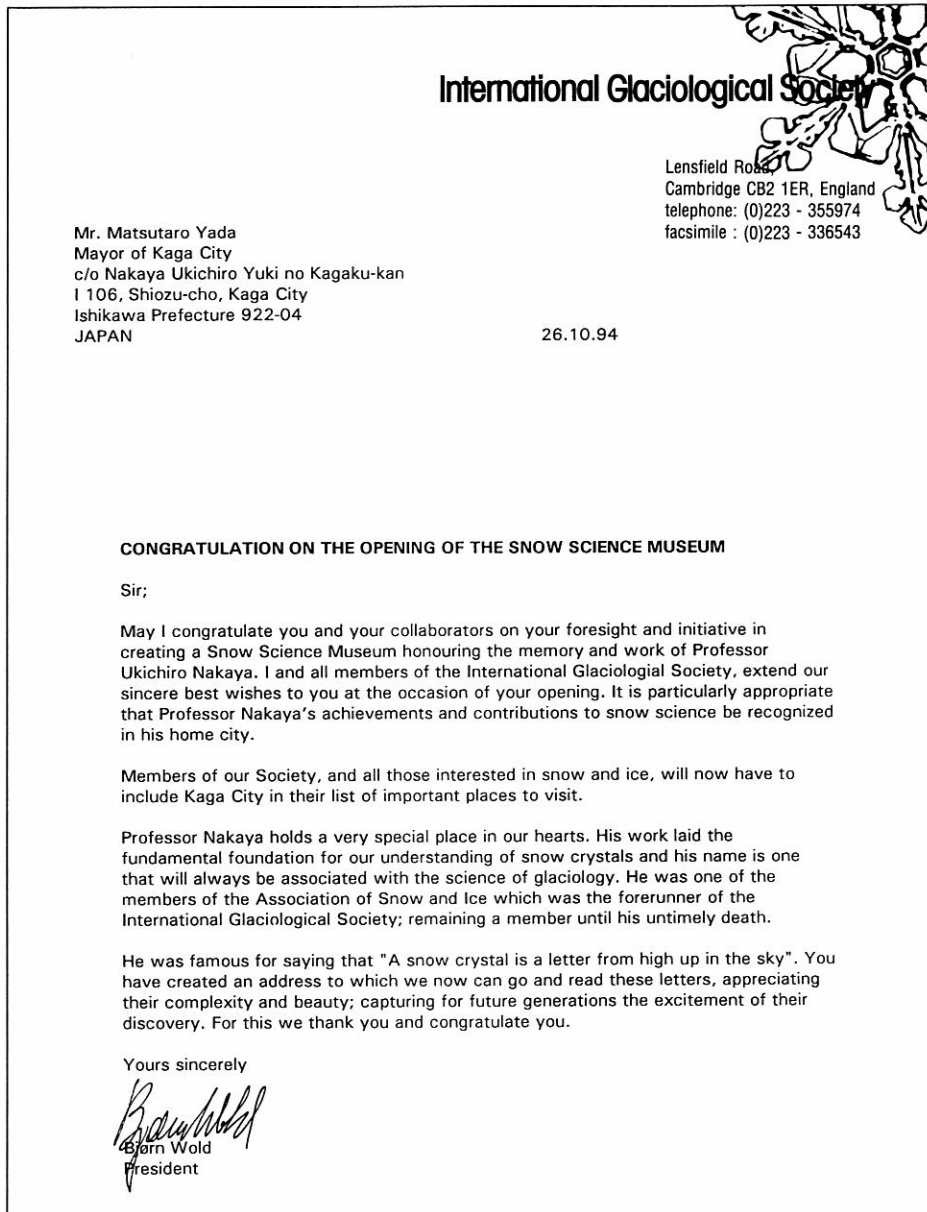


1929年フランスでの中谷宇吉郎(左)と、茅誠司氏。

写真左はパリ、ブーロニュの森、右はベルサイユ、プチ・トリアノンの庭にて

落成式への

国際雪氷学会会長からのメッセージ



1994年10月26日

加賀市長 矢田松太郎殿

雪の科学館落成式祝辞

謹啓 故中谷宇吉郎教授を記念する雪の科学館を創立されました貴下の先見性と独創力に対し、国際雪氷学会の会長並びに総ての会員は、この落成式の佳き日に当り、謹んでご祝辞を申し上げます。雪の科学についての中谷博士の業績と貢献が故郷加賀市においてこのように顕彰されますことは、まことに時宜に合ったものと存じます。

当学会の会員はもとより、雪と氷に関心を持つ総ての人々は、今後加賀市を重要な訪問場所のリストに加えることでありましょう。

中谷教授の名は、私どもの心に特別に記憶されております。その仕事は、雪の結晶についての私達の理解に基

本的な土台を築いたものであり、彼の名は雪氷学と共に絶えることなく記憶されるでしょう。彼はまた、国際雪氷学会の先駆けをなした国際雪氷委員会の副会長も勤め、その余りにも早すぎた逝去の日まで、同委員会の有力なメンバーとして活躍されました。

かれは「雪は天から送られた手紙である」という有名な言葉を残しましたが、貴方は今ここに、私どもがこの手紙を読み、また多様な雪の結晶の美しさを味わうことができると共に、この発見の感激を次の世代に伝える場所を創出してくださいました。私どもは、このことに深く感謝すると共に、重ねてお祝いを申し上げます。 敬具

英国ケンブリッジ
国際雪氷学会 会長
ビョルン・ウォルド
(訳/東 晃)

◇オープニング・イベント◇

開館記念講演（第33回加賀市文化祭式典）

小松左京氏「地球に生きる」より

11月3日、市民会館で行われた第33回加賀市文化祭式典（約300名が出席）で、雪の科学館の開館を記念して、小松左京氏の講演が行われた。

小松氏は中谷博士の業績を紹介し、雪の科学館への提言や希望を語った。また、SF小説「日本沈没」を書く背景となった近年の地球科学や通信・情報網の発展を詳しく紹介し、日本を「沈める」メカニズムを考える際、名大水圏科学研究所教授（当時）の樋口敬二氏から聞いた氷河内部の「トンネル効果」がヒントになったという秘話を紹介した。

※ ※ ※

「雪は天から送られた手紙である」は大変な名文だと思います。そして、雪の結晶の研究という基礎物理学に近いものが、あんなに胸をわくわくさせるような実験になるのかということ、若い時に大変感動した記憶があります。

昭和30年代、中谷先生は電力界の松永安左衛門さんに信頼され、今後のエネルギー問題をどういう風にやっていくかということで、先生が座長の役をなさっていました。私は、京大のイタリア文学を卒業し、大阪の小さな経済雑誌社に入って原子力の担当をやっていた関係で、丸の内にある電気事業連合会へ行ったとき、松永さんと一緒に出てこられたのが中谷先生でした。あとで先生だと伺いました。それから僅か2年後にもう亡くなられたんです。

雪の科学館を拝見しまして、中谷先生のいろいろな貴重な資料、日本が世界に誇れる水準にある低温物理学の研究のもとになった雪の結晶の写真乾板、寺田寅彦先生のお手紙等も拝見致しました。そして、画期的なことだと思ったのはチンダル像の実験というもので、観客が氷を操作し、内部から融けていく時におこるチンダル像を目の前で見られます。あれには大変感激いたしました。先生のお嬢様の美二子さんの「霧の彫刻」のしかけもあります。なにかやわらかい現象、不思議な現象ですね。中庭にある20億年以上も前にできたグリーンランドの岩石も、見ただけでロマンチックな気持になりました。

今の時代は、我々の生きる環境が情報の面でうんと変わってしまいました。そういう時、地方都市の加賀市はどんな意味を持つことができるか。それは、その時にある地球的な役割を引き受けていくってことですね。

加賀市が、中谷先生という大科学者がここの出身だというゆかりで雪の科学館をおつくりになった。これは、規模は小さいですが、雪に関する科学的情報や文化的情報をだんだん集めていって、雪についての科学知識・文化知識の大センターに育てることは決して難しい事ではありません。そして、市長さんをお願いしたいことですが、将来、あそこにマルチメディアの端末を一つ入れていただきたいと思います。これは難しいことじゃないんです。普通のテレビも見られるし、動画も送れる。つないでくれたよその図書館の文献も検索できる。例えば北大の雪氷学の研究所とネットワークを持つ。それから樋口さんのいる名古屋市科学館なんかとも絶えず連絡できるような形にする。そして時々そのやってることを大きな液晶プロジェクターで入館者にも見せる。あるいは、ここから北大の偉い先生に質問する。時には衛星を使って、アラスカに電波を飛ばして、そっちの氷の状況はどうですかとか、シベリアの今年の雪はどう？なんていうこともできるかもしれない。そういうものをやりとりする端末として、やっぱり一番いいのは雪の科学館じゃないでしょうか。あれは、まあ美しい国定柴山湯公園にできた磯崎新氏のちょっと変わった建物だというんじゃないで、そうしようと思えば、全世界の雪情報ネットワークの日本センターにすることができます。気象庁がだまってないかもしれませんが、構わないんです。その時に、中谷宇吉郎さんの、この葵の御紋が目にも見えなかってやりゃあいいわけなんです。

中谷先生が雪の結晶から地球認識のきっかけを開いてくれたように、雪の科学館を、将来の地球時代の為に、大事に知的に育てて欲しいと思います。

◇11月3日(祝)：片山津観光協会主催の開館記念イベントが館のスロープ下広場で行われ、雪の歌のメドレー、無料きのこなべ、模擬店、復水実験等で賑わった。無料のこの日、館には2200人が入場した。

◇11月30日(水)：文化会館で加賀市とNHK金沢の共催による開館記念の「歌謡ショーの夕べ」が開かれ、1450名が参加した。この一部はテレビで生中継され、後日FMで録音放送された。

雪結晶のデータバンク 宝石の輝き

富山大学理学部教授 対馬 勝年

昨年11月、中谷宇吉郎先生の生まれ故郷に先生の業績や資料を集めた雪の科学館がオープンしたことは、隣県に住み雪氷学の研究にたずさわるものにとって、この上なくうれしい。「雪の科学館」は夢のような出現である。

いうまでもなく中谷先生はわが国雪氷学の創始者の一人で、雪というありふれたものを通して科学のおもしろさをあますところなく伝えてくれた。やさしい言葉で書かれた随筆は「科学の面白さと魅力」をいかに多くの人に伝えたか測り知れない。科学館の舞台の主役が雪や氷であるだけに、私のような雪氷研究者には学ぶことが多かった。

中谷先生はまた国際学会においても活躍され、日本の雪氷研究を国際的舞台に引き上げてくれた。中谷先生の最も大きな功績の一つである雪結晶の研究は、その後も北大理学部気象学教室および北大低温科学研究所物理部門に引き継がれ、天然雪や人工雪結晶の研究分野で高いレベルが維持されている。同じ雪氷の道を歩むものとして、中谷先生は誇りであり、科学館の誕生をこの上なくいとおしく、大事なものに思う。

科学館を訪れる若い人たちに雪の魅力が伝わり、幾人かが雪（雪氷）の研究を志すようになるなら素晴らしいことと思う。また、成熟した大人には、雪を通して展開される自然の巧みが何かの靈感を与えるなら、それもまた素晴らしいことと思う。

今日では、中谷先生の論文や学術的著書を手に入れるのは困難となっている。折角の機会であるから、各資料のコピーを作られ、閲覧できるようにされたら館の利用価値が大変高まると思う。

雪結晶の研究について、故小林禎作先生から完成に近づいていると聞かされたことがあるが、近年再び雪結晶が注目され、研究が盛んになっている。科学館は中谷先生の広範な業績のうち雪結晶に焦点を絞っているように思う。展示としてはその方がユニークで効果的であると思う。そして、専属の学芸員にも恵まれていることであるから、中谷先生の雪結晶の研究史を一般の人にも分かりやすく整理すると



12月23日、対馬氏（後右から3人目）と雪氷学会事務局 戎（えびす）千衣子さん（その右）と新潟大学の和泉薫氏（後右から4人目）が富山大の学生とともに来館した。

ともに、最新の研究についても調査され、雪結晶に関するデータバンクを目指されたら国内外の学界においても貴重な存在になると思う。

筆者は雪の科学館のオープン記念式典に参加した感想の一つとして、科学館は研究者にとって「宝石箱」と感じた。宝石は展示された書物の中に埋もれていたり、映画フィルムや写真乾板の中にひっそりと身を隠し、光が差し込むのを待っているに違いない。しかし、ケースの中に保存され、冷たい透明な壁で遮断された宝石は決してその光を放つことは出来ない。宝石の輝きを解き明かせる人も高齢化している。この意味においても自由に閲覧できるようにするとともに、中谷先生の研究や思想を早く聞き取り記録におさめていただきたいと思う。

科学館は雪に限定され狭い領域を扱っている。日本中から列をなして見学者を集めることは期待していないと思う。むしろ、同じ人が何度も訪れ、訪れる度に新しい情報が得られ、新しい発見が行われ、科学館とともに成長していく姿が望ましいと思う。このような成長を支援するものとして、定期的な雪の講演会や研究会も考えられるであろう。また開館の式典で賞について触れておられたが、中谷先生は自由学園の生徒による霜柱の研究を紹介され、科学的研究として絶賛している。身近な雪は児童生徒にも多くの研究テーマを与えるであろう。中谷宇吉郎科学賞が科学の芽の育成に結び付くなら、それも素晴らしいことである。

氷の中に咲く「雪」の花

錦城小学校教諭 吉田 三恵子

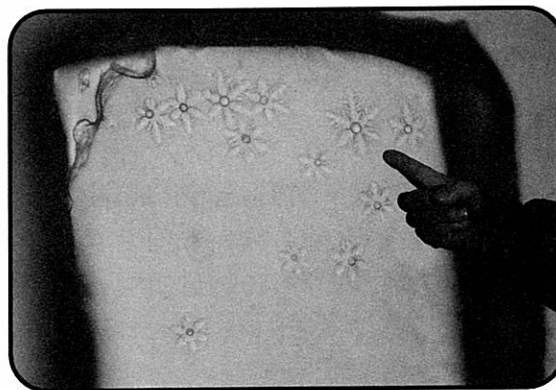
氷の中に「雪」の花が咲くんです——今年度の人事異動で、中谷宇吉郎の母校である錦城小学校に赴任したのが縁で、雪の科学館開館前のプレ・イベントに参加させていただくことになった時の、イベント・ディレクターの神田さんが発した一言は、謎めいた不思議なひびきでした。

夏の涼しさを誘う氷、冬の厳しさを物語る氷、この氷の中に雪の花が？——いったいどんな花が咲くのだろうと、教えられるまま氷を強力ライトで照らし、実体顕微鏡で覗きました。すると、小さな泡のようなもの（*）が氷の中央部にポツンとできたかと思うと、くるくる回り始め、泡のまわりの丸い形がみるみる大きくなっていくのです。そして、ある程度の大きさになると、今度は6方向に枝状に成長していきましました。最後には、透明な6枚の花びらを持つたくさんの花が、氷の中に咲き乱れました。思わず「うーん」とうなってしまった私でした。

「この氷の花（チンダル像）は、雪の結晶とよく似ていますが、雪ではなく、氷の中の氷の世界です。雪の結晶と氷の中に咲く花は、裏と表、正と負の関係にあるんです。」——わかったようなわからないような顔をしている私に、神田さんは、氷の結晶構造や雪の結晶の成長の仕方を一生懸命に説明して下さいました。ふだん何気なく見ている氷の中の神秘に触れたような気がした、不思議な時間でした。完成した雪の科学館の「チンダル像実験コーナー」は、プレ・イベントのときより技術的にも更に一段と磨きがかかったようで、うれしく思いました。沢山の人が「氷の花」の神秘を楽しむことができるのは、素晴らしいことです。

北陸の冬は、寒く、暗いイメージがあります。特に、雪が降る時期になると「いやだなあ」と思うばかりでした。しかし、中谷博士の研究は、そんな雪の、ロマンを教えてくれたような気がします。博士の母校のわが校の子供たちに、こんなロマンを語り伝えていくためにも、時々雪の科学館に足を運んで、

~~~~~  
（\*）この「泡」は、氷が融けて水になるときに体積が減るためにできる真空の泡。ただし、水蒸気は含まれている。



チンダル像

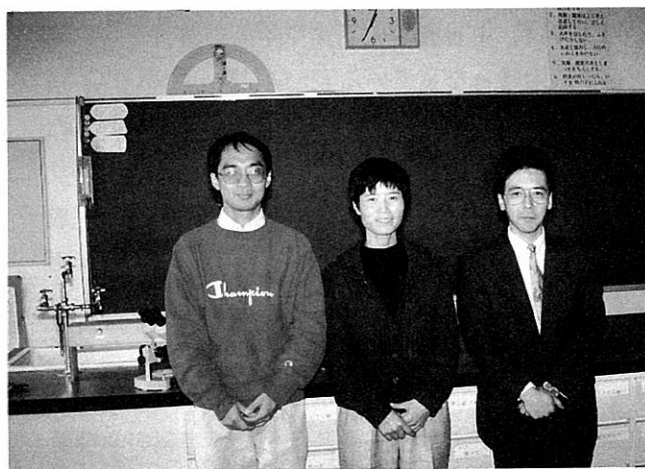
豊かな内容を吸収していきたいと思います。

最後に、この春卒業した私のクラスの水口桂太君が書いた「冬の花びら—雪博士中谷宇吉郎の一生」（高田宏著）の読書感想文の一部を紹介します。

\* \* \*

錦城小学校6年 水口 桂太

ぼくは、空から降ってくる雪が一つ一つ違う結晶だなんて初めて知った。その何百、何千という雪の結晶の写真を大変な苦勞と努力を重ねて撮ったり、重い病氣と闘いながらも人工雪の研究をやりとげるなんて、すごい人だと思った。何度も何度も失敗しても、最後にはやりとげてしまう中谷宇吉郎という人の雪に対する気持ちは、すごく深く、そして熱い思いがあるように思えた。すばらしい人生だと思う。



プレ・イベント（7月24日、市民会館）の実験アシスタント役を務めた錦城小学校の（左から）櫻木、吉田、長田の各先生。錦城小学校理科室にて





## この冬の雪 — 加賀と白峰と大雪山

中谷宇吉郎 雪の科学館 神田 健三

雪の科学館にはどんな雪が降るだろう？ — 加賀市に赴任して初めての冬は楽しみだった。その理由は2つあり、1つは、落成式に樋口敬二氏が述べたように、館に展示された雪の資料は北海道のものが多く、石川や北陸の雪について、写真を撮ったり調べたりしていくことは館の大切な課題だからである。もう1つは、館の設計者・磯崎新氏が「(館が) 雪を受ける両の掌でありたい」と表現したが、そういう視点からも雪を見てみたいと思ったからである。

最初の少しまとまった雪は、12月16日の午後から降り始めた。はじめはあられが多く、球形のほか円錐形もあり、ぼたん雪やみぞれにもなり、変化が著しかった。結晶の撮影をしたくても、気温が高く、スライドガラスに雪を載せるとすぐ融けてしまった。夜の8時頃でも+0.5℃までしか下がらないので、その夜はあきらめて気温が下がると思われる翌早朝を期した。しかし、深夜には降り止んだ。17日の朝、完成後初めて雪化粧した雪の科学館をカメラに収めることができた (写真①)。

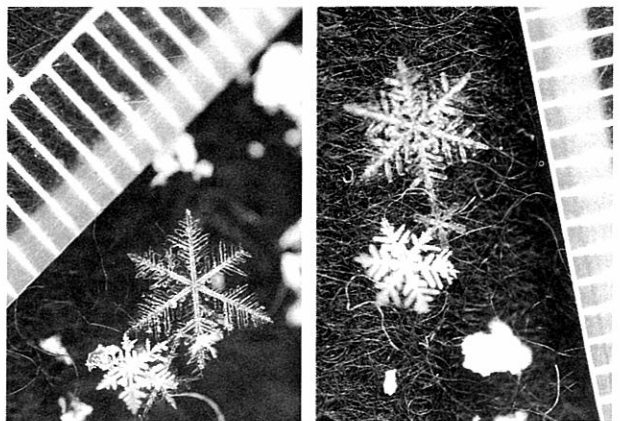
この冬最大の積雪をみたのは1月14～16日である。16日、館の周辺には多いところで35cmほど積もった。「グリーンランド氷河の原」の岩々は埋もれ、雪だるま作りを楽しむ人もいた。これで当分は根雪かと思ったが、実際には5日ほどで消えてしまった。

次に、写真②③は2月22日午後4時頃、白山山麓の白峰で、60cmのマクロレンズを着けた一眼レフカメラで撮った雪の結晶である。黒いビロードを貼った板に雪を受け、そのまま接写した。撮影地点は白峰スキー場の第一リフトの終点付近で、このときの気温は-3℃だった。この程度の気温でも、ビロードに受けた雪はなかなか融けなかった。白峰は館から車で1時間半ほどで行ける。この日は昼頃から冬型の気圧配置に変わるといふ予報だったので、館を1時過ぎに出発し、これらの写真を撮ることができた。白峰は、示した図からもわかるように、積雪量が多く、結晶の観察にも適しているように思われる。

2月の末頃、NHK札幌が、館に展示している雪の結晶写真を撮影した吉田二郎氏の協力を得て、雪の番組を作るため大雪山麓でロケ中だという知らせ



写真① 初めて雪化粧した雪の科学館 (12.17)



写真②③ 雪の結晶。白峰スキー場で (2.22)。目盛は1mm

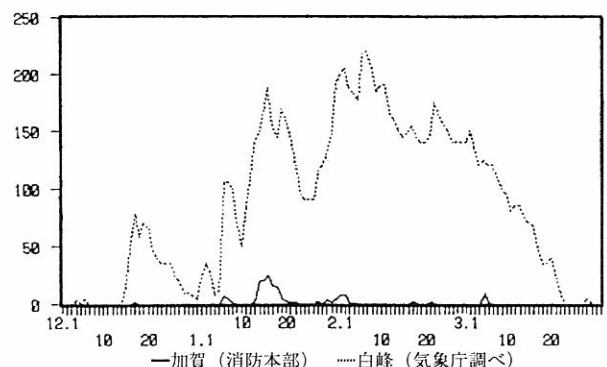


図 この冬に加賀と白峰の積雪深の変化 (単位はcm)

を受けた。私も前から吉田氏の撮影法を一度見たいと思っていたので、3月6日、旭岳温泉に出かけた。雪洞の中で、顕微鏡にセットしたハイビジョンのモニターで見る雪の結晶は、大変美しかった。このロケで作られた番組は、4月2日18時30分と同26日21時30分から「天空の妖精—雪の結晶・大雪山」の題でBS9 (ハイビジョン放送) で放送される。

最初の冬は、試行錯誤ぎみに終始した。しかし、次の冬以降のためのヒントをたくさん仕入れることができたように思う。

## 書誌情報——中谷宇吉郎または雪の科学館に関する文献紹介

- (1) 現在新本で購入できる単行本——中谷宇吉郎の著書または関連図書
- 中谷宇吉郎 雪の物語〔雪の科学館の解説書〕(1994.11) 総合監修樋口敬二, 監修高田宏・東晃・中谷美二子 (館の受付で頒布中。1000円。郵送希望の場合は送料310円をそえ、現金書留でお申し込みください。)
  - 雪 中谷宇吉郎(解説 樋口敬二) (1994.10) 岩波文庫
  - 中谷宇吉郎随筆集(編集 樋口敬二) (1988.9) 岩波文庫
  - 科学の方法 中谷宇吉郎(1958.6) 岩波新書
  - 冬のはなびら——雪博士中谷宇吉郎の一生 高田宏(1986.4) 偕成社
- (2) 中谷宇吉郎又は雪の科学館と関連のある最近の図書
- 海にも雪があった 井上直一(1992.10) (内容問い合わせ先=雪の科学館)
  - 日本の『創造力』13巻(1993.9) NHK出版 ◇雪氷の研究開拓者中谷宇吉郎 樋口敬二, 中谷美二子 (pp413-424)
  - かみふらの郷土をさぐる 12号(1994.2) ◇十勝岳と中谷宇吉郎博士 金子元三 (pp19-29)
  - 氷の文化史 田口哲也(1994.5) 冷凍食品新聞社
  - 読みなおす一冊(1994.8) 朝日新聞社 ◇雪 樋口敬二 (pp134-137)
  - 北大理学部同窓会誌 36巻(1994) ◇中谷宇吉郎雪の科学館 東晃 (pp3-5)
  - 雪氷学会公開シンポジウムレジメ 雪の科学と文化(1994.9)
  - 雪氷北信越 13号(1994.12) ◇「中谷宇吉郎雪の科学館」紹介 神田健三 (pp46-51)  
◇中谷宇吉郎雪の科学館を見学して 対馬勝年 (pp52-53)
  - 科学朝日 1995.1 ◇雪は天から送られた手紙である 五十嵐道子 (pp4-7)
  - 文藝春秋 1995.1 ◇中谷宇吉郎の『雪』 池内紀 (pp443)
  - P H P 1995.2 ◇[ことば] 真理は偉大なる誤謬である 毛利衛 (pp134)
  - B E - P A L 1995.2 ◇今年の冬は中谷宇吉郎が熱い (pp127)
  - リトルトリガー 1995.2 龍文社 ◇北陸の文化と雪 小林輝治・安原武彦・神田健三 (pp37-39)
  - 子供の科学 1995.2 ◇「雪」小森長生 (pp125)
  - 明日の友94 1995早春号 ◇雪は天から送られた手紙である 小川ミチ (pp28-31)
  - 新建築 1995.3 ◇中谷宇吉郎雪の科学館 平林繁, 中谷美二子 (pp143-154, 282-283)
  - 雪氷 57巻1号(1995.3) [小特集「中谷宇吉郎雪の科学館」によせて] (pp60-68)  
◇I 中谷宇吉郎雪の科学館の設立の意義 東晃 ◇II 「中谷宇吉郎雪の科学館」の案内 神田健三  
◇III 「中谷宇吉郎雪の科学館」の余話 樋口敬二 ◇[新刊紹介] 雪 古川義純 (pp69-70)
  - かがの文化No 3 1995.3 [特集 中谷宇吉郎] (pp8-34) (内容問い合わせ先=雪の科学館)  
◇中谷宇吉郎と故郷 高田宏 ◇中谷先生の知られざる研究の側面 東晃  
◇中谷先生の思い出 田中久一郎 ◇フォト/雪の結晶 撮影吉田六郎, 解説神田健三  
◇中谷宇吉郎雪の科学館の紹介 神田健三 ◇年譜 ◇[詩] 雪 原田大助 (pp55)
  - 雪と氷の世界 若濱五郎(1995.3) 東海大学出版会
  - 富山県民生涯学習カレッジ 1995.3 ◇いい人いい言葉との出会い 久泉迪雄
  - 愛知県総務部文化振興局 文化叢書7 1995.3 ◇地球環境 樋口敬二
  - デイテール 124 (1995.4 春季号) ◇雪の結晶形のスカイライト (pp20-21)
  - I C E (国際雪氷学会発行)  
◇NAKAYA UKICHIRO MUSEUM OF SNOW AND ICE Akira Higashi (投稿中)
- SNOW MAN NET 1994.9-10 (pp25), 岳人 1994.11 (pp37), CLUB 1994.12 (pp110), 財界につぼん 1995.1 (pp56-57)  
旅の手帖 1995.2 (pp66), 歴史研究 1995.2 (pp8-9), 地方自治職員研修 1995.3 (pp47), CHEEK 1995.2 (pp55)
- ◎この他情報誌や新聞の記事は多数あるが、紙面の関係で割愛した。当館で把握していない書誌情報もあると思われるので、お教えいただければ幸いです。

【中谷宇吉郎関連資料】

- ・白峰別報（昭17.12.25）中谷教授講演会速記【北森滋氏より】
- ・志ら峰14号（大正4）【湯浅治男氏より】
- ・新聞（昭41.9.25）社会意識を持った科学者【孫野家より】
- ・Kamifurano郷土をさぐる12号【上富良野町より】
- ・寺田寅彦記念館友の会：寅彦研究 榭（かしわ）1～4号
- ・仁科記念財団：3号館仁科資料の内容一覧

【雪氷関連資料】

- ・氷の文化史 田口 哲也
- ・雪と氷の科学 若濱 五郎
- ・雪景の形成手法に関する研究 植生 雅章
- ・北大低温科学研究所：低温科学物理編総目次（1944-91）  
低温科学 2,3輯, 物理編 51,52,53 輯
- ・雪と遊ぶ本 雪を考える会編
- ・遊雪辞典 国土庁地方振興局編
- ・冬は友だち（道新ポケットブック） 北海道新聞社
- ・環日本海域における酸性雨・雪 講演要旨集2～6
- ・おぢや市雪イベント関係資料

【博物館関連資料】

- ・石川県白山自然保護センター：白山のひとと自然地理学編  
はくさん12～22, 白山の自然誌2・5・9～14  
研究報告11・16・17・19・20
- ・富山市科学文化センター：研究報告17号, 展示解説書  
収蔵資料目録6号, 館報14号, とやまと自然17巻2号
- ・名古屋市科学館：事業概要（平4,6）, 紀要No.18
- ・札幌市青少年科学館：事業概要（平6）, 新しい気象1983,94
- ・西掘栄三郎探検の殿堂：地球を愛した創意の旅人  
日本の探検家たち

【その他】

- ・どうやって空気を売るといのか 絵/田口 富士雄

この通信は当面年2回の発行なので、今号で落成式特集をお送りすることになりました。落成式には、氷河堆石の輸入に協力して下さったデンマークやグリーンランドの関係各位の出席があり、国際雪氷学会会長からのメッセージも届き、国際色豊かな幕開けになりました。この背景には、中谷宇吉郎の業績についての国際的評価の高さがあり、館建設に関わった多くの方々の努力があったと思います。

開館以後5ヶ月間の来館者は2万3千人でした。来館された方々の感想の全体像を知ることは難しくても、洩れ聞こえる声から想像すると、満足感を持って帰られる方が多いように思います。今号では、バラエティに富んだ来館者をスナップ写真等で紹介しました。

開館前後から、マスコミ各社が取材に来訪し、さまざまな報道がなされました。開館にあわせて、絶版中だった『雪』が、岩波文庫として新かなづかいで復活し、昨秋の雪氷学会（金沢）では中谷宇吉郎と雪の科学館をテーマにしたシンポジウムが開かれ、『雪氷』や『かがの文化』では特集が組まれました。ある雑誌の記事の副題に「この冬は中谷宇吉郎が熱い」とありましたが、まさにそのような状況だったと思います。今号では、中谷宇吉郎や雪の科学館に関する最近の書誌情報を紹介しています。

当館は、中谷宇吉郎と雪と氷についての情報を集約・発信できる館を目指し、また「科学ばなれ」の風潮がある中で科学と科学者の魅力を伝えるという教育の要請にもこたえられるよう、一層の充実を図っていきたく考えています。今号でも、貴重なご投稿をいただきましたが、引き続き当館へのご指導とご鞭撻をお願い申し上げます。

最後に、中谷宇吉郎に関する情報や、雪氷の科学・文化についての情報をお寄せいただければ、大変幸いに存じます。（K.K.）

インフォメーション

開館時間 ● 9:00～17:00

■映画「科学するところ—中谷宇吉郎の世界」(25分)  
の上映開始時間〔2階映像ホール〕

9:30 10:30 11:30 13:00 14:00 15:00 16:00

(状況により、上映時間を変更することがあります。)

休館日 ● 水曜日・年末年始(12/29～1/3)

入館料 ● 一般 500(420)円

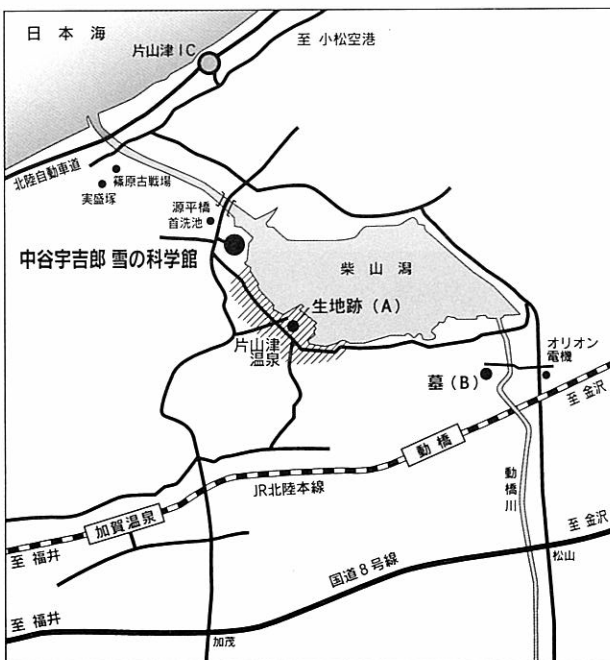
小・中・高校生 160(130)円

- ( )内は20名以上の団体料金
- 加賀市内の小・中学生は無料

アクセス ● JR加賀温泉駅から10分  
(車で)

小松空港から15分

北陸自動車道 片山津インターから5分



(A) 中谷宇吉郎の生地跡・・・現在の加賀信用組合。碑がある  
(B) 中谷宇吉郎の墓・・・加賀市中島町の共同墓地内

加賀市 中谷宇吉郎 雪の科学館

〒922-04 石川県加賀市潮津町イ106番地  
TEL 07617-5-3323 FAX 07617-5-8088